

第28回「ハートミーティング」意見交換の内容について

結ゆいの会（京都市保健師会）

★参加メンバーからの主な声

- 東日本大震災の被災地支援を通じて、公衆衛生の大切さとその第一線である保健センターや、人と人、人と専門機関を繋げるコーディネータとしての保健師の役割の重要性を改めて感じた。
- 仙台市の職員の方も被災者であり、心に傷を抱えながら業務に当たられていることを忘れてはならない。休みなく働き続けておられる職員の方の健康が心配である。
- 実際に現地を見て、想像を超えた現状に涙が出そうになった。子どもの心のケアを含めた長期的な支援が必要である。
- 現地では、地元の民生委員の方や学校の先生方と、お互いの良いところを出し合い、情報を共有しながら、活動させていただいた。私たちの支援を地元の資源や制度に繋げ、早く普段通りの生活に戻っていただきたい。
- 京都に戻った後、一緒に働いた仙台市の職員の方から近況を伝えるメールをいただき感謝した。「保健師という仕事をしているからこそ」できる、人との出会いや出来事に感謝したい。
- 保健師活動を超えて、「公務員はどうあるべきか」、「行政の役割」や、「コミュニティの活性化」といった広い視野で課題に向かうことを学んだ。今後の業務にいかしていきたい。

★市長からのコメント

- 被災地支援では、医療専門家の役割が非常に大きい中、保健師としての活動は大変だったと思うが、よくやってくれた。感謝している。
- 私自身、2度被災地に行き、地域コミュニティや地域のリーダーの存在、つまり「地域力」が大きな力になることを実感した。
- 南三陸町では、海を熟知している漁師さんたちが一早く危険を知らせ、地域の方々が声をかけ合いながら避難されたという話を聞いた。無縁社会といわれる大都市で起こっていたらどうなるだろうかと改めて地域の絆の大切さを実感した。
- 大規模な震災が起こった時は、いくら事前に想定していても想定外のことは起こりうる。そのような時にこそ、人と人との繋がりが生きてくる。コミュニティの活性化は危機管理に繋がる。
- 阪神淡路大震災は「ボランティア元年」といわれた。今回は「気づきの元年」「変革の元年」としなければならない。エネルギー問題だけでなく、我々の生活のあらゆることについて厳しく問われており、意識や行動を変革していく必要がある。